

パラダイス思想の観点からみる『第4エズラ書』の 夢幻視について

壬生, 正博
福岡歯科大学 : 客員教授

<https://doi.org/10.15017/7183284>

出版情報 : 総合文化学論輯. 20, pp.1-16, 2024-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン :

権利関係 : Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



パラダイス思想の観点からみる『第4エズラ書』の夢幻視について*

壬生 正博

はじめに

中世ヨーロッパの文芸作品、特に夢幻視 (dream visions) を描いた物語を対象とする異界 (the other world) 研究において、パラダイス思想の史的背景を考察するには、ユダヤ教やキリスト教の正典、外典、偽典等は重要かつ注目すべき資料となる。小論では、旧約聖書外典のひとつである黙示文書4 Ezra『第4エズラ書』に記された夢幻視に焦点をあてて、中世ヨーロッパの夢幻視物語におけるパラダイス思想の史的足跡の一端を辿る。

I 外典 2 Esdras の中の文書 4 Ezra について

4 Ezra は、紀元1世紀初頭に創作されたと考えられており、旧約聖書外典に分類される2 Esdras (『第2エスドラス書』もしくは『第2エズラ書』) 中のひとつである。¹⁾この2 Esdras は全16章から成り、以下のように、4 Ezra を含む三つの文書が纏まったものと言われている。²⁾

章	文書名
第1章～第2章	5 Ezra (第5エズラ書)
第3章～第14章	4 Ezra (第4エズラ書)
第15章～第16章	6 Ezra (第6エズラ書)

これらの中でパラダイス思想を考察するために最も注目すべきは4 Ezra で、その次が5 Ezra である。一方、6 Ezra にはパラダイスの記述は見られない。この理由から、小論では主に4 Ezra に焦点をあてる。

2 Esdras の冒頭の第1章～第2章 (5 Ezra) は、B. M. METZGER によれば、³⁾以下の内容を持つ。祭司の家系であるエズラ (2Esd.1:1-3) が神の召命を受け、神の度重なる慈悲にもかかわらず道を踏み外したユダヤ (イスラエル) の民を戒める (2Esd.1:4-2:32)。これに続いて、エズラはイスラエルに行き神の戒律を伝えようとするが拒絶される (2Esd.2:33-41)。そして、シオンの山 (Mount Zion) に立つ大群衆が「彼らがこの世で罪を告白した神の子」からそれぞれ冠を授与されるという夢幻視を見る (2Esd.2:42-48)。

* 小論は、第22回総合文化学会オンラインシンポジウム (2022年4月9日) で発表した原稿に加筆修正したものである。

¹⁾ James H. Charlesworth, *The Old Testament Pseudepigrapha*, Vol. 1, pp. 517-520 を参照。

²⁾ David Noel Freedman, *The Anchor Bible Dictionary*, Vol. 2, p. 612 を参照。

³⁾ Charlesworth, *The Old Testament Pseudepigrapha*, Vol. 1, p. 517 を参照。

この導入部に続く第3章―第14章(4 Ezra)が小論で特に重視すべき内容をもっており、エズラが体験した七つの夢幻視が語られる。夢幻視の中に神の遣いである天使ウリエル(Uriel)が現れて、神の意図をエズラに啓示する。なお、4 Ezra からの引用文は、英訳聖書 *New Revised Standard Version* のウェブサイト⁴⁾に集録されたテキストを使用した。

II 4 Ezra のパラダイス描写

エズラが見た七つの夢幻視は、既に述べたように、パラダイス思想と深く関連している。以下、この点を念頭に置いて考察を進めていきたい。まず、第一の夢幻視は、以下のとおりである。

第一の夢幻視 (2Esd. 3:1-5:20) : 天使との対話

イスラエルの都が陥落して三十年が経過したとき、エズラはバビロンに住んでいた。就寝中の彼の心に様々な思いがよぎる。それは、シオン(エルサレム)が荒廃した一方で、バビロンの人々の繁栄を見たからである。このような境遇の中でエズラは第一の夢幻視を見る。彼は、地上のパラダイス(エデンの園)の中でアダム(Adam)が犯した罪と樂園からの追放、そして、その結果もたらされたアダムとその子孫に対する死の定めについて嘆き、崇高なる方(神)に以下のように問いかける。引用文には筆者の拙訳を付した。

“O sovereign Lord, did you not speak at the beginning when you planted the earth—and that without help—and commanded the dust⁵ and it gave you Adam, a lifeless body? Yet he was the creation of your hands, and you breathed into him the breath of life, and he was made alive in your presence.⁶ And you led him into the garden that your right hand had planted before the earth appeared.⁷ And you laid upon him one commandment of yours; but he transgressed it, and immediately you appointed death for him and for his descendants.

(2Esd. 3:4-7) (下線は筆者)

(ああ、崇高なる主よ、あなたは地上に植物を植え—しかも手助けもなく—そして塵を操りまだ生命を持たないアダムを誕生させた当初に語らなかったのですか。だが、アダムはあなたの手によって創造されたもの、生命の息を彼に吹き込まれ、彼はあなたの面前で生きるものとなった。そしてあなたは、地上が現れるよりも前にあなたの右腕が植えた庭(ガーデン)にアダムをお導きになられた。そして彼に命令をお与えになった。しかしアダムがあなたの命令に背くと、あなたはただちにアダムとその子孫に死をお定めになりました。)

この一節の中の“garden”とは、言うまでもなく、アダムが住んでいたエデンの園、つまり地上のパラダイスのことである。このようにエズラが深い嘆きに喘いでいると、そこに神

⁴⁾ ウェブサイトアドレス : <http://www.devotions.net/bible/00bible.htm>. なお、テキストについては、*The Holy Bible Containing the Old and New Testaments with the Apocryphal / Deuterocanonical Books: New Revised Standard Version*, Charlesworth, *The Old Testament Pseudepigrapha*, Vol. 1, pp. 524-555、ならびに R. H. Charles, ed. *The Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament, Volume Two: Pseudepigrapha*, pp. 561-624 も参照した。

の遣いである天使ウリエルが姿を現し、以下のようにエズラを諭すのであった。

⁵ I said, ‘Speak, my lord.’ And he said to me, ‘Go, weigh for me the weight of fire, or measure for me a blast of wind, or call back for me the day that is past.’ ⁶ I answered and said, ‘Who of those that have been born can do that, that you should ask me about such things?’ ⁷ And he said to me, ‘If I had asked you, “How many dwellings are in the heart of the sea, or how many streams are at the source of the deep, or how many streams are above the firmament, or which are the exits of Hades, or which are the entrances of paradise?”’ ⁸ perhaps you would have said to me, “I never went down into the deep, nor as yet into Hades, neither did I ever ascend into heaven.” (2Esd.4:5–8) (下線は筆者)

(私は言った「語ってください、我が主よ」。彼(天使ウリエル)は私にこう語った「行って、私のために火の重量を量りなさい。もしくは一陣の風を計りなさい、もしくは過ぎ去った日を私のために呼び戻しなさい。」私は答えて言った「生を受けた者の中で、あなたが私に求めている事を一体誰がすることができましょうか。」するとウリエルは答えて言った「もしも私が、どれくらいの数の住人が海の底にいるのか、あるいはどれくらいの数の川が深淵の源に流れているのか、あるいはどれくらいの数の川が天の上に流れているのか、あるいはどれがハデスの出口で、どれがパラダイスへの入り口なのか、と尋ねたなら、おそらく汝はこう答えるだろう「私は深淵に降りたことはありません。同じく、ハデスにも、ましてや天に昇ったこともありません」と。

こうして天使は、いと高き御方の道を人間エズラの力量では到底理解できないと説く(2Esd.4:11)。つまり、“those who inhabit the earth can understand only what is on the earth, and he who is above the heavens can understand what is above the height of the heavens”(2Esd. 4:21)(地上に住む者たちは地上のことのみに理解し、天に住む者たちは天の高みよりもっと上にあるものを理解できるのである)。このような文脈から推察すると、上記の天使の言葉に見られる“paradise”は、先ほどの引用に見られるアダムがいた地上のパラダイスではなく、神がいる“heavenly Paradise”(天のパラダイス)⁵⁾を示していると理解するべきであろう。このように考えるならば、天使はエズラの意識を地上ではなく神がいる天の聖域、つまり天のパラダイスへ向けさせようとしているのかもしれない。

第二の夢幻視(2Esd. 5:21–6:34) : 天使が語る終末のしるし

七日間の断食の後、エズラは、なぜイスラエルの民は多くの異邦人によって苦汁をなめさせられるのか、なぜ神が直接イスラエルを裁かないのか苦悶する。すると再び天使ウリエルが現れて問答が始まる。

天使はエズラに、天地が創造される前の状況と神の計画について語る。

¹He said to me, ‘At the beginning of the circle of the earth, before the portals of

⁵⁾ Charles, *Pseudepigrapha*, p. 564 を参照。

the world were in place, and before the assembled winds blew, ²and before the rumblings of thunder sounded, and before the flashes of lightning shone, and before the foundations of paradise were laid, ³and before the beautiful flowers were seen, and before the powers of movements were established, and before the innumerable hosts of angels were gathered together, ⁴and before the heights of the air were lifted up, and before the measures of the firmaments were named, and before the footstool of Zion was established, ⁵and before the present years were reckoned and before the imaginations of those who now sin were estranged, and before those who stored up treasures of faith were sealed—⁶then I planned these things, and they were made through me alone and not through another; just as the end shall come through me alone and not through another.’ (2Esd.6:1–6) (下線は筆者)

(天使は私に言った「丸い大地のはじまりの時に—それは世界の門が適所に置かれるよりも前、集められた風が吹くよりも前、雷の轟音が響きわたるよりも前、稲光の閃光が輝くよりも前、そしてパラダイスの土台が築かれるよりも前、そして美しい花々が見られるよりも前、そして動く力が成り立つよりも前、そして無数の天使たちが集うよりも前、そして大気の高みが上げられるよりも前、そして天空の尺度に名が与えられるよりも前、そしてシオンの足載せ台が造られるよりも前、そして現在の年が数えられるよりも前、罪を犯した者たちの想像力が引き離されるよりも前、信仰という宝物を蓄えた者たちが刻印されるよりも前—この丸い大地のはじまりの時に、私はこれら諸々の事を計画した。これらは、私を通してのみ成ったのであり、他のものによって成ったのではない。同じく、世の終わりは私を通してのみやって来るのであり、他のものから来るのではない。)

天使のこの言葉によって、エズラは、人智の及ばない神の計画が世界創造の前からすでに存在していたことを知る。上の引用に見られる“paradise”は、ここでは天地創造の計画があるので、地上のパラダイスを意味していると理解してよいであろう。そして、天使は終末のしるしについて語る。

²⁵ ‘It shall be that whoever remains after all that I have foretold to you shall be saved and shall see my salvation and the end of my world. ²⁶And they shall see those who were taken up, who from their birth have not tasted death; and the heart of the earth’s inhabitants shall be changed and converted to a different spirit. ²⁷For evil shall be blotted out, and deceit shall be quenched; ²⁸faithfulness shall flourish, and corruption shall be overcome, and the truth, which has been so long without fruit, shall be revealed.’ (2Esd.6:25–28) (下線部は筆者)

(私があなたに予言したすべてが起こったあとに生存している者たちは皆救われ、彼らは私の救済とこの世の終わりを目撃するであろう。そして彼らは、生まれてから死を経験したことのない者たちが天へと引き上げられるのを見るだろう。そして地上に住む人々の心に変化が生じ、改心するだろう。なぜなら邪悪は拭い去られ虚偽は消え、貞節が栄えて腐敗は打ち負かされ、ずっと実を結ぶこと

がなかった真実が明かされるからだ。)

上の下線部に記されている「生まれてから死を経験したことの無い者たち」とは、具体的には、炎の二輪戦車に乗って天へ昇っていった預言者エリヤ (Elijah、2 Kings 2:11)、そして、三百六十五年もの間生きて神と共に歩み、神に好まれて天に上げられた義人エノク (Enoch、Gen.5:24) を指していると思われる。⁶⁾ この二人は、神がいる天のパラダイスに引き上げられた例である。

第三の夢幻視 (2Esd. 6:35-9:25) : 終末と魂の道

第三の夢幻視では、裁きの日の様子が、同じく天使ウリエルによって語られる。裁きの日には、まず以下の光景が生じるといふ。

²⁶ ‘...the time will come, when the signs that I have foretold to you will come to pass, that the city that now is not seen shall appear, and the land that now is hidden shall be disclosed. (2Esd.7:26) (下線は筆者)

(「その時は必ずやってくる。その時には、わたしがあなたがたに予告したしるしが生じ、今は見えない都が姿を現し、今は隠されている地が明らかとなるであろう。)

この引用にある“city”とは、ここでは“heavenly Jerusalem” (天のエルサレム) のことであり、まだ明かされていない“land”とは“heavenly Paradise” (天のパラダイス) を意味していると考えられる。⁷⁾つまり、これらが裁きの日に地上に降りてくるというのである。そして、神の子メシア (Messiah) が誕生し、彼と共にいる者たちは四百年間も喜びながら生きるという。しかし、その後、メシアは死ぬ。そして、世界は創造された日のように七日間の原初的な沈黙へと戻され、墮落した者たちは地上から一掃される。そして、以下のように、神による審判が行われ、善なる者たちはパラダイス——恐らく天のパラダイスのことであろう——へ昇天し、一方、邪悪な者たちは地獄へと墮とされることになる。

³³The Most High shall be revealed on the seat of judgement, and compassion shall pass away, and patience shall be withdrawn. ³⁴Only judgement shall remain, truth shall stand, and faithfulness shall grow strong. ³⁵Recompense shall follow, and the reward shall be manifested; righteous deeds shall awake, and unrighteous deeds shall not sleep. ³⁶The pit of torment shall appear, and opposite it shall be the place of rest; and the furnace of hell shall be disclosed, and opposite it the paradise of delight. ³⁷Then the Most High will say to the nations that have been raised from the dead, “Look now, and understand whom you have denied, whom you have not served, whose commandments you have despised. (2Esd.7:33–37) (下線は筆者)

(いと高き御方は裁きの席に姿を現し、同情は消え去り、忍耐も消える。裁きだけが残し、真実が立ち上がり、忠実さが強くなる。償いがそれに続き、報酬が現れる。

⁶⁾ Charles, *Pseudepigrapha*, p.576 を参照。

⁷⁾ Charles, *Pseudepigrapha*, p.582 を参照。

善なる行いは目を覚まし、不義なる行いは眠らない。苦しみの穴が現れ、その反対の側には休息の地が現れる。そして地獄のかまどが明かされ、その反対側には喜びのパラダイスが姿を現す。それから、いと高き御方は死から蘇った民たちにこう言うであろう「さあ見て理解せよ、おまえたちが誰を否定したかを、誰に仕えなかったかを、誰の戒めを軽蔑したかを。）」

この一節には、天国と地獄の対比がなされている。上記一節の“(t)he pit of torment”（苦しみの穴）とは苦悩に満ちた地獄へ通じている穴を指し、“the furnace of hell”（地獄のかまど）とは、言うまでもなく、地獄に堕ちた者たちが焼かれるかまどのことである。これに対して、“the place of rest”（休息の地）あるいは“the paradise of delight”（喜びのパラダイス）とは、休息や喜びに満たされた天のパラダイスのことである。このように、この一節は 4 Ezra が持つ天国と地獄の観念の一端を知ることができる興味深い箇所である。

審判が行われる日の記述には、以下のように、否定文型（negative formula）が使用されている。この否定文型は、中世の夢幻視物語にも継承されており、パラダイス描写の特徴のひとつである。恐らく、パラダイスの超絶性をクローズアップさせる隠喩（metaphor）であると思われる。

³⁹a day that has no sun or moon or stars, ⁴⁰or cloud or thunder or lightning, or wind or water or air, or darkness or evening or morning, ⁴¹or summer or spring or heat or winter or frost or cold, or hail or rain or dew, ⁴² or noon or night, or dawn or shining or brightness or light, but only the splendour of the glory of the Most High, by which all shall see what has been destined. (2Esd.7:39–42)

（太陽、月、星、雲、雷、稲妻、風、水、空気、暗闇、夕方、朝、夏、春、暑さ、冬、霜、寒さ、雹、雨、露、正午、夜、夜明け、輝き、明るさ、光、これらすべてがなく、ただ最も高き御方の栄光の輝かしさのみがあるその日に、すべての者たちは定められたものを見るであろう。）

このように審判の日には、太陽や月などの人間を取り囲むあらゆるものが消えて自然環境に大異変が起こるのである。しかし、その後は、上記一節に“the splendour of the glory of the Most High”（最も高き御方の栄光の輝かしさ）と記されているように、神の栄光がやってくる。これは、天の世界が地上に現れるという、パラダイス描写のひとつと理解してよいであろう。

以上のように、エズラが見た第三の幻視には、メシア、地獄、喜びのパラダイス、そして否定文型など中世の夢幻視物語にも使用される重要な要素が含まれている。

さらに、天使はエズラに、死後の魂が辿る道についても語っている。ある人物が死ぬと魂が肉体から抜け出て、自分の魂をお与えになった御方（神）のもとに再び帰る。それは、いと高き御方の栄光（glory）を讃えるためであるという。しかし、もしもその魂が、神の道を軽んじて戒律を遵守せず、神を畏れ敬う人々を憎んだ者の魂であるならば、これらの魂は、七つの道を彷徨い歩き、悲嘆に暮れることになる。これらの魂とは反対に、神の道を守った善なる魂が肉体から離れると、神の栄光（glory）と喜び（joy）に充たされて、七

つの階梯を通じて大いなる安らぎに至るという。このそれぞれの七つの階梯はたいへん興味深いので、これらの記述を比較対照するため一覧表を以下にまとめた。なお、苦しみの道は 2Esd.7:81－87、安らぎへの道は 2Esd.7:92－98 に語られている。

4 Ezra における七つの道の対照表

	邪悪な魂たちが苦悩へ至る道 (2Esd.7:81－87)	善なる魂たちが歓喜へ至る道 (2Esd.7:92－98)
第一の道	The first way, because they have scorned the law of the Most High. (第一の道は、彼らが最も高き御方の掟を軽蔑したからである。)	The first order, because they have striven with great effort to overcome the evil thought that was formed with them, so that it might not lead them astray from life into death. (第一の段階は、彼らは邪悪な考えが浮かんでも、それを多大な努力によって克服したからだ。それゆえに彼らは生から死へ迷うことはないだろう。)
第二の道	The second way, because they cannot now make a good repentance so that they may live. (第二の道は、彼らはもはや生きるために十分な悔い改めをすることができないからだ。)	The second order, because they see the perplexity in which the souls of the ungodly wander and the punishment that awaits them. (第二の段階は、彼らは不敬虔な魂たちが困惑しながら放浪する姿や彼らの罰を見るからだ。)
第三の道	The third way, they shall see the reward laid up for those who have trusted the covenants of the Most High. (第三の道にいる魂たちは、最も高き御方の契約を信じた人々に用意された報酬を目にする。)	The third order, they see the witness that he who formed them bears concerning them, that throughout their life they kept the law with which they were entrusted. (第三の段階の魂たちは、自分たちを創造し給うた御方が、自分たちに対して行う証言や、彼らが委ねられた掟を生涯ずっと守りぬいたという証拠を目にする。)

第四の道	The fourth way, they shall consider the torment laid up for themselves in the last days. (第四の道程では、魂たちは終わりの日に自分たちに準備された拷問のことを考えることになる。)	The fourth order, they understand the rest that they now enjoy, being gathered into their chambers and guarded by angels in profound quiet, and the <u>glory</u> waiting for them in the last days. (第四段階では、魂たちは自分たちの部屋に集められて、深淵なほど静かに天使に守護されながら自分らが今享受している休息を知り、終わりの日には栄光が自分らを待っているのを理解する。)
第五の道	The fifth way, they shall see how the habitations of the others are guarded by angels in profound quiet. (第五の道では、魂たちは他の人々の住居が深淵なほどの静けさで天使たちに守護されている様子を見る。)	The fifth order, they rejoice that they have now escaped what is corruptible and shall inherit what is to come; and besides, they see the straits and toil from which they have been delivered, and the spacious liberty that they are to receive and enjoy in immortality. (第五段階では、魂たちは腐敗しやすいものからすでに脱却し、来るべきものを受け継ぐことに歓喜する。その上、彼らは自分らが救い出された苦境と労苦を目にし、彼らが不死の状態で享受する広大な自由を見る。)
第六の道	The sixth way, they shall see how some of them will cross over into torments. (第六の道では、魂たちは自分たちの中の数名がいかにして拷問へ向かっていくか見ることになる。)	The sixth order, when it is shown them how their face is to shine like the sun, and how they are to be made like the light of the stars, being incorruptible from then on. (第六の段階で魂たちに示されるのは、自分たちの顔が太陽のように輝いて、星々の光のようになり、もう朽ち果てることがない様子である。)

第七の道	The seventh way, which is worse than all the ways that have been mentioned, because they shall utterly waste away in confusion and be consumed with shame, and shall wither with fear at seeing the <u>glory</u> of the Most High in whose presence they sinned while they were alive, and in whose presence they are to be judged in the last times. (第七番の道は、これまでの道よりも悪い。なぜなら、彼らは混乱のために衰弱してしまい、羞恥心のあまり疲労困憊し、最も高き御方の栄光を見てその畏怖ゆえに生気を失い、そして生きている間に神の前で罪を犯したゆえに、最後の時が来たら神の前で裁かれるからだ。)	The seventh order, which is greater than all that have been mentioned, because they shall rejoice with boldness, and shall be confident without confusion, and shall be glad without fear, for they press forward to see the face of him whom they served in life and from whom they are to receive their reward when <u>glorified</u>. (第七の段階は、これまで述べたどれよりも素晴らしい。魂たちは大いに歓喜し、自信に溢れ、混乱せず、恐怖も消え、喜びに満たされる。なぜなら、彼らは人生で仕えた御方の顔を謁見するべく先へと進んでいくからであり、栄光を受けられるときにその御方から報酬を受け取るからだ。)
------	--	---

以上が苦悶あるいは栄光へ至る七つの階梯である。両者を比較すると「光」と「闇」の対比でもある。この点から、両者の道に使用されている“glory”という語がキーワードになると思われる。上表の「邪悪な魂たちが苦悶へ至る道」の欄の「第七の道」には“the glory of the Most High”（最も高き御方の栄光）が、そして、「善なる魂たちが歓喜へ至る道」の欄には「第四の道」に“the glory”（栄光）と「第七の道」に“glorified”（栄光を受けられる）という箇所が見られる。つまり、苦悶へ至る道は、神の栄光から次第に遠く離れていく暗黒の道であり、最後の第七段階に至ると、地獄堕ちする魂たちは、最後の審判の前に「最も高き御方の栄光」を直に見ることによって、二度と神の栄光に接することができないという絶望感に襲われるのである。ここで、視点を変えて、筆者が特に研究の対象としている中世の夢幻視物語の代表作 *The Vision of Tundale*（15 世紀の中英語翻訳）に目を向けたい。この作品には、上述した「邪悪な魂たちが苦悶へ至る道」の「第七の道」にいる魂たちの苦悶が継承されていると思える箇所があるので、言及しておきたい。⁸⁾それは以下の一節である。

Also þe mon þat dampnede [e]ls
To þe payne of Helle for hys wykkednesse,
He shall such ioye in Heuen se
That more ioye myzte neuer be; (873–876)

(邪悪さゆえに地獄の苦悶へと／永遠の罰に処せられる者もまた／天界の大いなる至福をみるだろう。／それ以上ないほどの喜びを。)

⁸⁾ Rodney Mearns, *The Vision of Tundale*, p. 110 を参照。

このように、地獄に墜ちた者たちは、永遠に天の至福に接することができなくなる。そして、それだけ一層深刻な苦悩に襲われるということがこの一節から理解できるだろう。

一方、安らぎへの道は、神が住む輝きに充ちた聖所へ至る道である。特に第七段階は、天の階層（ヒエラルキー）にあてはめれば、第七天としての至高天（最高天）であると推察でき、上表の「善なる魂たちが歓喜へ至る道程」にある第七の段階に記された“they press forward to see the face of him whom they served in life”（彼らは人生で仕えた御方の顔を謁見するべく先へと進んでいく）という箇所からわかるのは、この段階に到達すると、神の御顔を直に見るという至福直観（beatific vision）が義なる魂に与えられるということである。これは神の道を歩いた者に与えられる最高の報酬であろう。

しかしながら、エズラは、義人の魂が神の栄光を与えられる道があると諭されても、アダムの原罪とその子孫たちにもたらされた死に対する悲痛は癒されることはなかった。その心境をエズラは以下のように吐露している。

⁴⁸O Adam, what have you done? For though it was you who sinned, the fall was not yours alone, but ours also who are your descendants. ⁴⁹For what good is it to us, if an immortal time has been promised to us, but we have done deeds that bring death? ⁵⁰And what good is it that an everlasting hope has been promised to us, but we have miserably failed? ⁵¹Or that safe and healthful habitations have been reserved for us, but we have lived wickedly? ⁵²Or that the glory of the Most High will defend those who have led a pure life, but we have walked in the most wicked ways? ⁵³Or that a paradise shall be revealed, whose fruit remains unspoiled and in which are abundance and healing, but we shall not enter it ⁵⁴because we have lived in perverse ways? ⁵⁵Or that the faces of those who practised self-control shall shine more than the stars, but our faces shall be blacker than darkness? (2Esd.7:48–55)（下線は筆者）

（ああ、アダムよ、あなたは何をしてしまったのか？ 罪を犯したのはあなただったが、墮落はあなただけではなく、あなたの子孫である私たちの墮落にもなった。永遠の時間が私たちに約束されたが、もしも死をもたらし行為をしたならば、何の役に立つというのか。永遠の希望が約束されたとしても、惨めにも失敗したならば、何の役に立つというのか。安全で健全な住居が私たちのために確保されているとしても、邪悪な生活をしているのであれば、何の役に立つというのか。最も高き御方の栄光が純粋な人生を過ごした人々を守ってくれても、邪悪な道を歩んだとしたら、何の役に立つというのか。果物が実り、豊かさと癒しがあるパラダイスが明らかにされたとしても、神が望まぬ生き方をしたゆえにそこに入れないのなら、何の役に立つというのか。自制心を遵守した人々の顔が星々よりも輝いてるとしても、私たちの顔が暗闇よりも黒ずんでいるのであれば、何の役に立つというのか。）

このように、アダムの罪ゆえに、その子孫もパラダイスには入れないと嘆いている。しかし、この一節から、4 Ezra のパラダイス観についても知ることができる。すなわち、神のいるパラダイスには“an immortal time”（永遠の時間）が存在しており、“an everlasting hope”（永遠の希望）に溢れていること、そして、先ほども言及した“the glory of the Most

High”（最も高き御方の栄光）、あるいは“the faces of those who practised self-control shall shine more than the stars”（自制心を遵守した人々の顔が星々よりも輝いてる）という箇所から、パラダイスが輝きに充ちている様子を知ることができる。しかし、アダムが犯した罪ゆえにこれらすべてのものが人間から失われたと嘆くエズラの悲哀によって、アダムの罪の重さがより一層読者に迫ってくるのではないだろうか。

第三の幻視には、天へ上げられる前のエズラの神への祈りも記されている。下記の如くである。

²⁰O Lord, you who inhabit eternity, whose eyes are exalted and whose upper chambers are in the air, ²¹whose throne is beyond measure and whose glory is beyond comprehension, before whom the hosts of angels stand trembling ²²and at whose command they are changed to wind and fire, whose word is sure and whose utterances are certain, whose command is strong and whose ordinance is terrible, ²³whose look dries up the depths and whose indignation makes the mountains melt away, and whose truth is established for ever—

（2Esd.8:20–23）（下線は筆者）

（主よ、あなたは永遠に存在し、その瞳は気高く、あなたの上位の室は天空にあり、あなたの玉座は計り知れないほど大きく、あなたの栄光は理解を超えており、あなたの前では天使の軍勢が震えて立ち、あなたの命令で彼らは風や火に変わる。あなたの言葉は確実で、あなたの発言は揺るぎなく、あなたの下命は力強く、あなたの定めは厳格で、あなたの容貌は深海をも乾かし、あなたの憤りで山々は溶け、あなたの真実は永遠に変わることがない。）

この引用の“upper chambers are in the air”（上位の室は天空にあり）という箇所は、恐らく神の住居である天のパラダイスを想定していると思われる。⁹⁾そして、“throne”（神の玉座）については、例えば、旧約正典エゼキエル書（Ezekiel）の主題でもあり（Eze.1:26-28）、中世の異界夢幻視物語においても、パラダイス描写の典型的な記述要素になっている。また、引用中の“glory”「栄光」について、*Pseudepigrapha* は、“God's glory would suggest to the Jewish mind the ineffable light of the divine presence which pervades heaven”（神の栄光は、ユダヤ人の心には、天を貫く神の存在の言葉で表現できない光を暗示している）¹⁰⁾と解説しており、この点から“glory”は“light”と密接な関連があることが理解できる。聖書正典にも“glory”が“light”と結びついている箇所がある。例えば、旧約聖書には、シオン（Zion）の栄光を記した下記の一節がある。¹¹⁾

¹ "Arise, shine, for your light has come,
and the glory of the LORD rises upon you.

² See, darkness covers the earth

⁹⁾ Charles, *Pseudepigrapha*, p.594 を参照。

¹⁰⁾ Charles, *Pseudepigrapha*, p.594 を参照。

¹¹⁾ テキストは *Holy Bible, New International Version Containing the Old Testament and the New Testament* を用いた。

and thick darkness is over the peoples,
 but the LORD rises upon you
 and his glory appears over you.
³ Nations will come to your light,
 and kings to the brightness of your dawn. (Is.60:1-3) (下線は筆者)
 (「立ち上がって、輝きを放て、あなたたちの光が到来したからだ、主の栄光があ
 なたたちの上に立つからだ。見よ、闇が大地を覆い、濃い闇が人々を覆いつくす。
 だが、主はあなたがたの上に立ち、主の栄光があなたたちの上に現れる。諸国が
 あなたたちの光に集い、諸王があなたたちの夜明けの輝きにやってくる。)

また、新約聖書には、以下の箇所がある。

An angel of the Lord appeared to them, and the glory of the Lord shone around them, and they were terrified. (Lk.2:9) (下線は筆者)
 (主の御使いが彼らに現れ、主の栄光が彼らの周りを照らし、彼らは恐れおののいた。)

God, who said, “Let light shine out of darkness,” made his light shine in our hearts to give us the light of the knowledge of the glory of God in the face of Christ. (2Cor.4:6) (下線は筆者)
 (神は「光は闇から輝け」と言い給い、神の光を私たちの心の中に輝かせ、キリストの面前で神の栄光の知識の光を私たちに与え給うた。)

これらの諸例から、“glory”は神の光と密接な関係があることがわかる。先述した一覧表に再び目を向けると、邪悪な魂たちが経験する七つの道は、このような“glory”の「光」が次第に薄れていき、最後の第七段階(2 Eds.7:87)に至っては、光が全くない暗黒世界のみが存在するのであろう。

天使ウリエルは、エズラが心正しきゆえに、報酬としてパラダイスが与えられると以下のように語る。

⁵¹But think of your own case, and inquire concerning the glory of those who are like yourself, ⁵²because it is for you that paradise is opened, the tree of life is planted, the age to come is prepared, plenty is provided, a city is built, rest is appointed, goodness is established, and wisdom perfected beforehand. ⁵³The root of evil is sealed up from you, illness is banished from you, and death is hidden; Hades has fled and corruption has been forgotten; ⁵⁴sorrows have passed away, and in the end the treasure of immortality is made manifest. ⁵⁵Therefore do not ask any more questions about the great number of those who perish. (2Esd.8:51-55) (下線は筆者)

(しかし、あなた自身の事を考えて、あなた自身のような人々の栄光について問いなさい。なぜなら、あなたのためにパラダイスが開かれ、生命の木が植えられ、来

るべき時代が準備され、充足が与えられ、都市が建てられ、休息が定められ、良い状態が確立され、智恵があらかじめ完成されるからだ。悪の根はあなたから封印され、病気はあなたから追放され、死は隠される。ハデスは逃げ出し、腐敗は忘れ去られる。悲しみは消え、やがて不死の宝が生じる。ゆえに、大勢の者が滅びることについて、もう問いかけるべきではない。)

この一節中の“paradise”は、*Pseudepigrapha* の脚注に“the heavenly Paradise, which was shut up on account of Adam's sin, and which will be opened after the last Judgement to receive the righteous and elect” (アダムの罪のために閉ざされたが最後の審判の後に開かれて、義人や選民を受け入れる天のパラダイス)¹²⁾と解説されている。そして、上の一節にある“the tree of life” (生命の木) は、“one of the striking features of the heavenly Paradise on which the apocalyptists love to dwell” (黙示録の作者たちが住みたいと願う天のパラダイスの顕著な特徴のひとつ)¹³⁾であった。また、同じく上の一節の“city”とは、“Heavenly Jerusalem, which will compensate for the loss of Jerusalem on earth” (地上のエルサレムの喪失を埋め合わせる天のエルサレム)¹⁴⁾を指している。従って、エズラが与えられるこのパラダイスは、義人たちの第七の道 (2Eds.7:98) に記された至高天であると考えられる。

そして、上記一節には、神の属性 (attributes of God) である“plenty” (充足)、“rest” (休息)、“goodness” (良い状態)、そして“wisdom” (智恵) 等にも言及されており、この点では、天のパラダイスが神の属性を備えていることを示している。さらに、パラダイス描写に付随する否定文型について言えば、上の一節には否定文型は見られないが、上記一節の中の“The root of evil is sealed up from you, illness is banished from you, and death is hidden; Hades has fled and corruption has been forgotten” (悪の根はあなたから封印され、疾病はあなたから追放され、死は隠される。ハデスは逃げ出し、そして腐敗は忘却される) という内容を逆から捉えれば、「パラダイスには病気、死、ハデス (地獄)、そして腐敗もない」というように否定文型の意味合いでこの文章を解することは可能であろう。

このように、上の一節には天のパラダイス (エルサレム) に関する多くの特徴が記されている。一言で言えば、そこは神の光輝が溢れる永遠の生命の世界である。義人エズラの魂は、死後にこのような天の世界が約束されているのであろう。

第四の夢幻視 (2Esd. 9:26-10:59) : 息子を失って泣く女とシオンの再建

エズラは第四の夢幻視の中で、「息子を失って泣く女」 (2 Esd. 9:38-10:18) の幻視を見る。エズラがこの女と話をしていると、突然、女の姿が見えなくなり代わりに都市 (a city) が出現した (2Esd.10:27)。エズラは、この女の突然の豹変に戸惑う。そして、エズラは天使ウリエルを呼び求めて、この謎めいた風景の意味を解いてくれるよう懇願する。すると天使ウリエルがやってきて、エズラに“the Most High has revealed many secrets to you” (至高の神は多くの秘密をあなたに明らかにされた) (2 Esd. 10:38) と言って、幻視の

¹²⁾ Charles, *Pseudepigrapha*, p.597 を参照。

¹³⁾ Charles, *Pseudepigrapha*, p.597 を参照。

¹⁴⁾ Willis Barnstone, ed. *The Other Bible*, p. 516 を参照。

意味を以下のように解き明かす。

⁴⁴The woman whom you saw is Zion, which you now behold as a city being built.
⁴⁵And as for her telling you that she was barren for thirty years, the reason is that there were three thousand years in the world before any offering was offered in it. ⁴⁶And after three thousand years Solomon built the city, and offered offerings; then it was that the barren woman bore a son. ⁴⁷And as for her telling you that she brought him up with much care, that was the period of residence in Jerusalem. ⁴⁸And as for her saying to you, “My son died as he entered his wedding-chamber”, and that misfortune had overtaken her, this was the destruction that befell Jerusalem. (2Esd.10:44–48) (下線は筆者)

(あなたが見た女はシオンであり、あなたは今、都市が建設されつつあるのを目にしているのだ。そして、彼女が三十年も不毛であったとあなたに告げたその理由は、供物がそれに捧げられる前にこの世に三千年もの時間があつたからだ。そして三千年が経ち、ソロモン王はこの町を建て、供物を捧げた。その後、不毛の女は息子を産んだ。そして、この女が我が子を苦労して育てたとあなたに言ったことについては、それはエルサレムに住んでいた間のことだったのだ。そして、彼女はあなたに言った、「私の子は結婚式の部屋に入ったときに死んだ。」この不幸が彼女にふいに襲いかかったというのは、エルサレムを襲った破壊であつたのだ。)

天使の言葉によれば、泣く女とはシオンの山 (Mount Zion) だったのである。この一節は、ソロモン王が建設した都市、つまりエルサレムの繁栄とその没落が主題となっており、この女が泣く最大の要因は、都市エルサレムの没落であった。

ここでシオンの山について触れておきたい。例えば、*Oxford Dictionary of the Bible* の “Zion” の項を参照して小論と関連がある点に着目すると、¹⁵⁾シオンは、エルサレム (2 Sam.5:6–10) をも意味しており、イスラエルの民によって神聖視され (Ps.48:1–2) 、天の都エルサレム (Heb.12:22) と同一視されていたことが理解できる。この点から、4 Ezra におけるシオンは、地上の聖なる山だけではなく、恐らく、天の都エルサレムも含意していると思われる。

第五の夢幻視(2Esd. 11-12):メシアによるイスラエルの解放

第五の幻視では、「海から昇ってきた鷲」と「森から出てきた獅子」が描かれる。獅子は、鷲の不正を裁き滅ぼす。ここでの獅子はメシアの象徴であり、鷲はローマ帝国を表している。この幻視は、政治的なメシアによるイスラエルの民の解放を意図している。

第六の夢幻視(2Esd. 13):海から昇る平和のメシア

第六の幻視は、「海から昇る人物」が主題となっている。この人物は “he whom the Most High has been keeping for many ages, who will himself deliver his creation” (いと高き

¹⁵⁾ W.R.F. Browning, *Oxford Dictionary of the Bible*, p. 415 を参照。この他に “ZION,” *New Catholic Encyclopedia*, 2nd ed., Vol.14, p.929 も参照。

御方が何年にもわたって守ってきた人物であり、自分で自分を創造する人物) (2Esd.13:26) である。彼は口から風、火、嵐を発し、戦闘のための槍や武器は所持していないにもかかわらず、シオンの上の山に立ち、彼を征服しようと襲ってきた諸国の大群を破滅させるという (2Esd.13:26-39)。その後、この人物は、北イスラエルの王ホセア (King Hosea) の時代にアッシリア帝国の王シャルマネセル (King Shalmaneser) の捕囚民となったイスラエルの民を別天地へと導くのである (2Esd.13:40-41)。この海から昇る人物は、平和のメシア、あるいは宗教上のメシアと考えられる。

第七の夢幻視(2Esd. 14): 神の啓示書

第七の夢幻視は、パラダイスと直接の関連はないが、エズラの魂が肉体に戻ったあとの様子が描かれているので、この第七の夢幻視についても言及しておきたい。

第六の幻視を見てから三日が経ったとき、エズラは、櫟の木(oak)の下に座っていると、主(Lord)の声が聞こえてきた(2Esd. 14:1)。主は、エズラに今まで啓示されたしるしと、彼が見た夢幻視、そしてその解き明かしを心に秘めておくよう命じる(2Esd. 14:8)。そして、今の世は老年期に近づいており、審判の日が間近に迫っていると告げられる。そして、エズラは神の知恵を授けられ、四十日もの間、昼も夜も語り続けて、神の啓示を九十四巻の書物にまとめる(2Esd. 14:37-44)。この内、初めの二十四巻は公にしてよいが、残り七十巻は、知恵ある者たちに渡すように命じられる(2Esd. 14:45-46)。なぜならこれらの書物は、“the spring of understanding, the fountain of wisdom, and the river of knowledge”(理解の泉、知恵の泉、そして知識の川)(2Esd. 14:47)だからであるという。

以上が、特にパラダイス思想の観点からみた 4 Ezra の注目すべき記述内容である。

結語

小論は、旧約聖書外典のひとつである 4 Ezra に記された夢幻視に焦点をあて、そのパラダイス思想を考察した。エズラの嘆きの発端は、人類の始祖アダムがエデンの園、すなわち地上のパラダイスで犯した原罪であった。地上で苦悩するエズラの前に天使ウリエルが現れ、エズラが見た不可解な夢幻視の謎を解き明かし、神の啓示を知らせる。その啓示により、天使ウリエルは、エズラに対してアダムを嘆いて時間を浪費するのではなく、神が住む天のパラダイスに意識を向けるよう諭しているように思われる。天使ウリエルの言葉によって、天のパラダイスは、神の光が溢れ、永遠の喜びと安らぎのある聖域であることが理解できた。このように、エズラと天使ウリエルとの問答は、本文書の進行に必要不可欠であり、興味を高める要素ともなっている。

中世ヨーロッパの夢幻視物語においても、主人公と天使との問答や神の啓示等が継承されている。しかし、そこに登場する主人公は、必ずしもエズラのように神に忠実な義人だけではなく、大罪を犯した罪深き人物の場合もある。この観点から見ると、中世の夢幻視物語において、神は罪深き者に対しても天使を通じて恩寵を与えて改悛の情を芽生えさせ、天のパラダイスへ意識を向上させるという内容に変化、移行しているように思える。恐らく、主人公のみならず、読者たちも天のパラダイスへと誘われる契機となったであろう。いずれにしても、小論で試みた 4 Ezra のパラダイス思想の考察により、中世の夢幻視物語におけるパラダイス思想の史的潮流の一端を辿ることができたのではないだろうか。

参考文献

- Barnstone, Willis. ed., *The Other Bible*. New York, NY: HarperSan Francisco, 2005.
- Bjork, Robert E., ed. *The Oxford Dictionary of the Middle Ages*, Oxford: Oxford University Press, 2010.
- Borchert, Donald M., ed. *Encyclopedia of Philosophy*, Detroit, MI: Thomson Gale, 2006.
- Browning, W. R. F. *Oxford Dictionary of the Bible*. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- Carson, Thomas., Joann Cerrito, project editors, *The New Catholic Encyclopedia*, 2nd. ed. Detroit, MI: Thomson Gale, 2003.
- Charles, R. H. ed. *The Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament. Volume Two: Pseudepigrapha*, Berkeley, CA: Apocryphile Press, 2004.
- Charlesworth, James H. ed. *The Old Testament Pseudepigrapha*, vol. 1. New York, NY: Doubleday, 1983.
- Erickson, Carolly. *The Medieval Vision: Essays in History and Perception*. Oxford: Oxford University Press, 1976.
- Freedman, David Noel. editor in chief, *The Anchor Bible Dictionary*. New York, NY: Doubleday, 1992.
- Gardiner, Eileen. ed. *Visions of Heaven & Hell before Dante*. New York, NY: Italica Press, 1989.
- Holy Bible, New International Version Containing the Old Testament and the New Testament* (Grand Rapids, MI: Zondervan Publishing House, 1988).
- Mearns, Rodney. ed. *The Vision of Tundale*, MET 18. Heidelberg: Carl Winter, 1985.
- Morgan, Alison, ed. *Dante and the Medieval Other World*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Turnbull, William Barclay, ed. *The Visions of Tundale: Together with Metrical Moralizations and Other Fragments of Early Poetry*. Edinburgh: Thomas G. Stevenson, 1843.
- Vouchez, Andre, ed. *Encyclopedia of the Middle Ages*. Cambridge: James Clarke & Co, 2000.

[On Dream Visions of the “4 Ezra” from the Perspective of Paradisiacal Thoughts]

[MIBU Masahiro・福岡歯科大学客員教授・イギリス文学・比較思想]